『黒漆牡丹文七宝繋沈金足付盆』修理報告

佐久本純[1]　土井菜々子[2]

Ⅰ.はじめに

本資料は、一般財団法人沖縄美ら島財団所蔵の『黒漆牡丹文七宝繋沈金足付盆』である。

令和4年5月9日より令和5年3月28日まで沖縄県立博物館・美術館修理修復室内の琉球漆工藝舎にて修復が行われた。修復にあたっては、佐久本純を担当職員とし、土井菜々子を修復責任者兼担当者とした。

Ⅱ.修理報告

1.名称

黒漆牡丹文七宝繋沈金足付盆（No.64）

2.員数・法量(㎜)

一枚　高さ229　径495

3.資料概要

湾曲した鍔を持つ盆に高い高台が付く足付盆。見込みと鍔内側は朱漆塗で鍔外面から足の内側までは黒漆塗である。鍔内側に沈金による雷文を巡らせ、鍔縁は、金箔を貼った上に透漆を塗る白檀塗りを施す。鍔外面から足の外側面にかけては、七宝繁の地紋と牡丹文を沈金で描く。

---

[1] 一般財団法人 沖縄美ら島財団 総合研究センター 琉球文化財研究室 琉球文化財研究係 主事
[2] 琉球漆工藝舎 代表

4. 損傷状態

全体的に汚れが付着し、黒ずむ。火災により貼りついた薄葉紙の紙繊維や茶色い液体が滲出したと思われるシミも多く見られる。塗膜は劣化が進み、艶が失われている程である。盆部分は、これらの症状が顕著に見られる(図 1-1, 1-2)。

図 1-1　盆部分

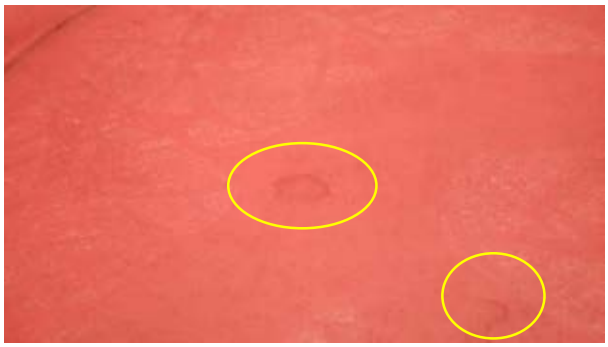


図 1-2　見込み　シミ

鍔縁に一箇所、巻胎構造の亀裂が入り、木地ごと段差が生じている。また、その亀裂周辺塗膜の損傷が進む。(図 2-1, 2-2)

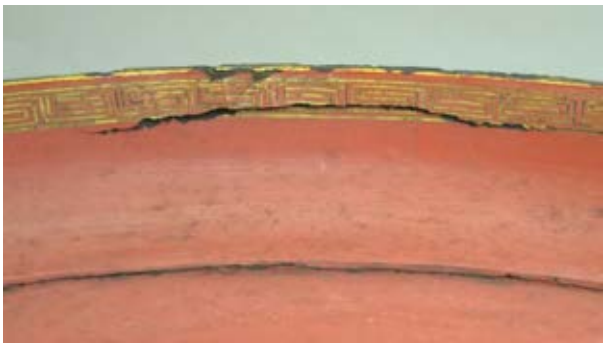


図 2-1　鍔部木地亀裂（内側）

図 2-2　鍔部木地亀裂（外側）

特に、鍔縁上面の損傷が著しく、木地が露出しているほどである(図 2-3)。見込みと鍔との接合部は、一周にわたり亀裂が生じる(図 3)。

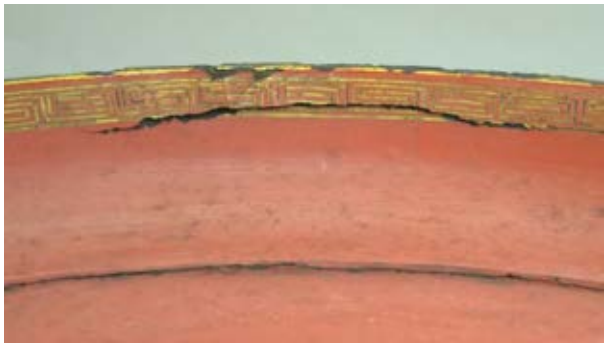


図 2-3　鍔縁上面　塗膜剥落

図 3　見込みと鍔の接合部　亀裂

一箇所、鍔外面から足にかけて樹脂がこびりついたような黒い汚れが目立つ(図 4)。足部分にも火災により付着した薄葉紙の繊維が所々に見られる(図 5)。

図 4　黒い汚れ

図 5　紙繊維の付着

足部縁の数箇所に欠損が見られ、下地や布着せが露出している(図 6-1, 6-2)。また、内側にも薄葉紙の付着した跡があり、シミが残る(図 7)。天板裏には、木地亀裂が入る(図 8)。

図 6-1　足　欠損部

図 6-2　足　欠損部（内側）

図 7　薄葉紙の紙繊維（足内側）

図 8　天板裏の亀裂

5. 修理原則

現在、我が国で行われている指定文化財漆工芸品の保存修理に則り、現状保存修理を原則として行う事とする。修理に際しては、充分に事前調査を行い、傷み等の現状を確認した上で修理工程を決定する。また、写真撮影を伴った修理の記録を取り、修理後と比較できるようにし、修理終了後報告書を作成し提出する。

6. 修理方針

火災被害による黒ずみ、シミなどは、汚れと共に可能な範囲で除去を行う。薄葉紙の付着によりできた色むらや朱漆塗膜の劣化に対しては、火災前の艶に近づけるよう漆を摺り重ねる。修理後も定期的に経過観察を続け、必要に応じて、摺漆を施す。

7. 修理工程

①修理前写真撮影、調査
②クリーニング
③漆固め
④構造接着、塗膜押さえ
⑤刻苧充填
⑥摺漆
⑦下地付け
⑧修理後写真撮影
⑨報告書作成

8. 修理内容

はじめに修理後との比較ができるよう、修理前撮影および現状調査を行った。クリーニングは、精製水を含ませた綿布を用いて、付着していた薄葉紙の繊維を除去した。滲出したと考えられるシミの除去には、精製水やエタノール水溶液を含ませた綿布での拭き取りでは、あまり効果が見られなかったため、重曹水を使用して拭上げた(図 9-1, 9-2)。重曹水を使用した際は、汚れと混合して出来た塩を残留させないよう、精製水による拭取りを行なった。側面に見られる黒い付着物は重曹水である程度除去することができたため、油性の汚れと考えられる。

図 9-1　重曹水クリーニング

図 9-2　重曹水クリーニング

次の工程の前処置と塗膜強化のため漆固めを行なった。黒漆塗の塗膜には生漆を溶剤[3]で希釈したものを塗布し、表面に余分な漆が残らないように拭き取った(図 10)。朱漆塗面には色味の変化を避けるため、調合した透漆(木地呂、梨子地、生上味)を使用し、黒漆塗面と同様に作業を行なった(図 11)。

[3] ターペンタイン/ホルベイン社

図 10　生漆による摺漆

図 11　摺漆（透漆）

火災被害による塗膜劣化が進む朱漆塗面に関しては、技術指導の松本氏と協議を重ねた上で、漆を 3 回ほど摺り重ねて艶を取り戻した。

摺漆が乾いた後、木地露出部分や木地構造の亀裂箇所に、接着用に調合した麦漆を溶剤で希釈したものを含浸させ補強した(図 12-1, 12-2)。なお、鍔と見込の木地接合部は亀裂が深いため、複数回に分けて含浸した。

図 12-1　麦漆含浸

図 12-2　麦漆含浸

押さえを行なうための準備として器物の形状に合わせて木型を作り、塩化ビニールシートをあてた治具を作成した。鍔部の木地亀裂部に溶剤で希釈した麦漆を数回に分けて流し込み、クランプで圧着した(図 13-1, 13-2, 13-3)。

図 13-1　麦漆含浸

図 13-2　圧着

亀裂箇所や欠損部には、刻苧を複数回に分けて充填し成形した。見込みと鍔の接合部の亀裂には接着強度を高めるため、繊維状の刻苧綿を混ぜた刻苧を使用した(図 14-1, 14-2)。

図 13-3　圧着

図 14-1　接合部の刻苧充填

図 14-2　欠損部の刻苧充填

刻苧を充填した面には、麦漆に細かな木粉と四辺地粉などを練り合わせた下地を付けて表面を整えた。硬化した下地部分を研いだ後、漆固めを行い、色艶を調整した(図 15-1, 15-2)。最後に、修理前と比較出来るよう、修理後撮影を行った。

図 15-1　下地付け

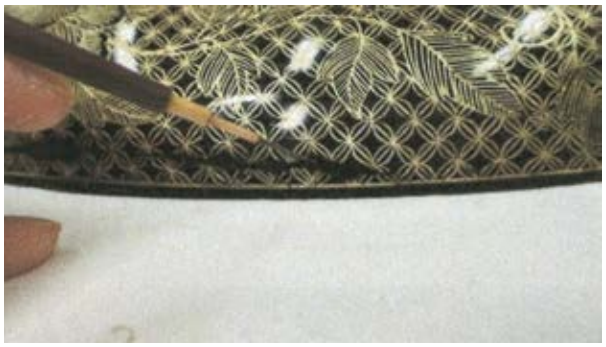


図 15-2　下地部分の固め

9. 修理場所

沖縄県立博物館・美術館内修理修復室

10. 修理期間

令和 4 年 5 月 9 日～令和 5 年 3 月 28 日

11. 所見

・木製、鍔および足の湾曲した部分は巻胎構造。

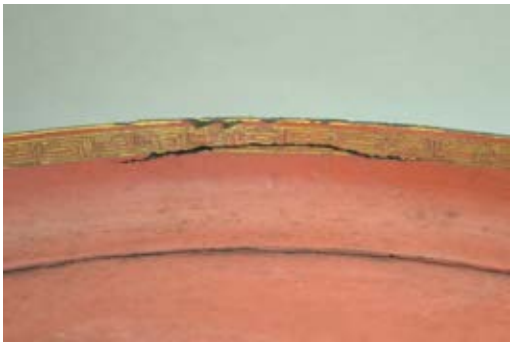
修理前修理後写真

全景　修理前

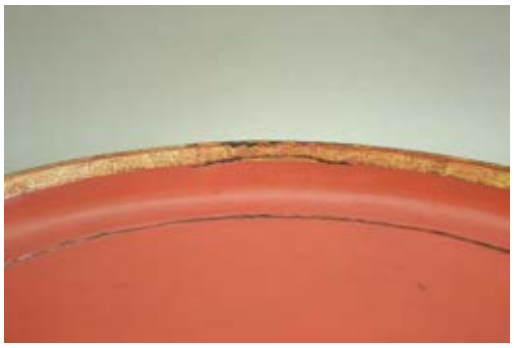
全景　修理後

見込み　修理前

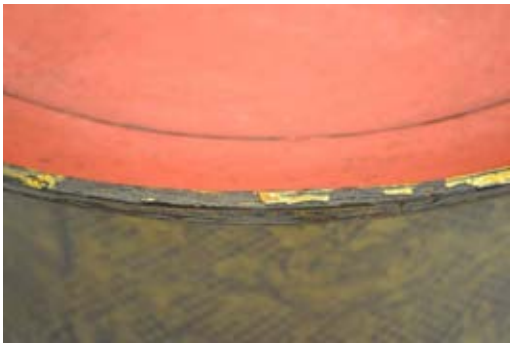
見込み　修理後



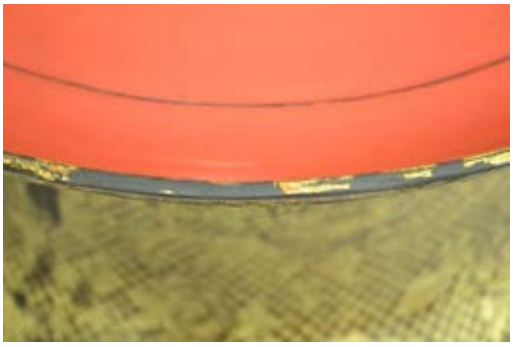
鍔縁木地亀裂　修理前



鍔縁木地亀裂　修理後



鍔縁塗膜欠損　修理前



鍔縁塗膜欠損　修理後